

青窓紀聞 卷三（第二冊）

《表紙》

《題箋》

「青窓紀聞 三」

《貼り紙》

「文政元 戊寅

同 二 乙卯

同 三 庚辰」

《見返し》

文政元戊寅 豪潮繁昌 宝篋印塔

孚式大権現

同 二己卯 米価下直

六月十二日大地震

又大雷

弥米安

同 三庚寅 妙興寺宝物 七月熱田浜浚新堀

大水 九月大須塔柱建

米安種々御容赦

《本紙》

張州

文政元戊寅年

○正月廿日、出来町黄蘗大龍寺五百羅漢二時の鐘の願相濟、今日鐘樓手斧始の式あり。午の刻を初て撞申候。程なく時の鐘ハ止候よし。

○二月廿日夜六半時、大なる光物良より坤へ飛行く。其光り白昼の如く、其音雷電に似たり。三月二日夜九時にも、ちさき光り物飛行。

○二月廿一日を三日の間、熱田海蔵門外西側東向ニ舞台しつらひ、奉納の能あり。二軒茶屋の北也。

願主

大岡宮福大夫

木下正三郎

橋本佐和次

右、宮福ハ熱田社家にて申樂座のよし。正三郎門弟なり。

《図略（3頁）》

初日

千歳

翁 面箱

土井平八

三番叟

長尾寅蔵

高砂 大岡金二

小川庄右衛門

豊田奎右衛門

川原彦次

吉田彦太郎

小川竹次

八嶋 橋本佐和二

黒田鐐蔵

岡崎

柘植万二郎

梅村次郎吉

旧井光三郎

葵の上 村瀬清八郎 庄右衛門	三輪 正三郎 庄右衛門	田村 金次 鏑藏	九世戸 佐和二 庄右衛門	翁 千歳 面箱 三番叟	二日目	那須	惡太郎	千鳥	文相撰	金札 祝言 金一 小川又藏	船弁慶 橋本佐和二 小川庄右衛門	羽衣 木下庄三郎 小川庄右衛門
森徳二郎	丹羽宗右衛門	長谷川左藏	伝左衛門 坂元藏	伝左衛門 坂元藏		山田悦藏	土井平八	寺澤栄四郎	小林五十五郎	石川三右衛門 岡本半十郎	豊田奎右衛門 岡本半十郎	岡崎 鈴木伝左衛門 大野伊三郎
彦二 竹二	柴田豊太郎 竹次	善六	真吉 鉄藏	真吉 鉄藏						服部長三郎 佐藤徳兵衛	安藤奎之助 梅村善六	中野真吉 岡田鉄藏
祝言 嵐山 佐渡狐	鉢木 佐和次 庄右衛門	松風 正三郎 庄右衛門	経政 小川徳之助 鏑藏	東方朔 正三郎 又藏	翁 千歳 面箱 三番叟	三日目	腹たい須	靱猿	八幡之前 子盗人	融 佐和二 又藏	熊坂 金二 鏑藏	
悦藏	伊三郎	半十郎	彦太郎	大橋兵右衛門 児井光三郎	小林五十五郎				梅村権介	成田熊二郎	山本安内	伝左衛門 友吉
	竹次	竹次	徳兵衛	奎之助 善六				寅藏	悦藏	伊藤仙次 次郎吉	服部長三郎 佐藤徳兵衛	

縄なひ

小林左平次

止動方角

五十五郎

○寅当春、橘町裏芝居小屋、表町江出す。小屋の格好ハ三都同様にて、向側横町など茶屋を立ならべ、其粧ひ目さましく、右芝居小屋の北の横町は、此時初て出来也。四月十一日大入にて、市川蝦十郎、坂東重太郎、大谷友右衛門、片岡小六郎、藤川花友、市川門之助、嵐璃光など来りて大当り也。委しくハ別巻にあり。

○四月二十七日、あつた 大宮御修復に付、外遷宮あり。即参詣しけるか、殊の外の大賑合にて、社内の篝火は白昼のごとく、挑灯はきらほしのことし。乍去、

神幸の時は灯火なく闇夜に成候由、只、社家師人等御供にてホウ引くといふ声はかり。心耳清浄として匹夫の身にはそらおそろしく、神代のむかし思ひしられ侍る。神官田嶋丹波守神扉をひらく。家の奇瑞あるよし。

○三月十五日午の半刻頃、中地震あり。

○四月、日置橋、伝馬橋掛直る。伝馬橋の擬宝珠の柱是迄木なりけるを、今年石にて造れり。

○此比、岐阜にて打首になりし者の辞世

今迄にぬすみしかねは身につかず 身につく金は今ははしめて

○五月五日、熱田神祭に付馬の塔、当年は至て美々敷粧ひ馬数多し。大概見たる数を左に誌す。

○本馬 牛立村方式正 印ばれんなり。

二疋 長刀二百振 子供ハ棒を持 百余人

右、衣服いろ／＼の品に紅天鷲絨、黒天鷲絨、紅縮緬などにて、背に牛を切付紋にて縁を金糸にてふせ

○本馬 旗屋より出す。衣服各下に紅板しめ縮緬、上には浅

二疋 黄ちりめん に紫式部投扇の図をいろ／＼に縫、其外

長刀 金摺箔の縮緬、或は上さらしの紋附裾模様様の帷子な

百振 と、近年の美服衆目をおとろかす。

○本馬 人数三千人、長刀二千ふりと申沙汰也。衣服の粧ひ

四疋 随分と美麗なれ共、右の二ヶ所の美服抜群ゆへ、見

苦しく見へ申候。

右、日置の馬の塔は、百七十年程以前に日置方馬をけるにあつたにて仕出し、鶉籠のだしを奪ひとり帰りけるに、今より四十一年以前日置方出しける時も、其形にて鶉籠のだしをつけ宮へ出けるに、先年の遺恨にて又々喧嘩をあつた方仕りけるを、やう／＼とにげ帰りけるよし。又候今年も右の鶉籠用ひ候筈にて、いろ／＼評定ありけるか、役所方も沙汰ある由にて、今年は遺恨散捨の為奉納と号し、馬にハ乗せず真先に鶉籠のしるしをつかせ、日置村の御師へ相達、奉納して帰りけるよし。

俄馬の数、予か見たるハ左に誌す。

○黒天鷲絨半天揃二十人程

○俄馬三井寺鐘供養之趣向三十人程

○大薬師鬼祭の趣向一群 ○狸々の趣向一群

○鐘馗鬼駟の趣向一群

○浴衣参の趣向一群

○伊勢まつり一群

○奴の趣向一群

○金毘羅同者一群

○西国三十三所回拜の趣向一群

○八丈綿片身ツ、続分の浴衣一群

○裸参りの趣向一群、是甚奇才也。

右の外、板締ちりめん繻伴など着用の分沢山ニあり。

○五月十八日、廿三年目にて七間町より馬を出しける。宿々よりもらひ候樽、蒸籠、菓子袋の類ひ、富澤町四町の間すき間もなく積ならへたり。夜に入候て、富澤町一丁目と記したる高張の挑灯二行にともし、家々のうちん山のことく、十八日の宵闇白昼のことし。馬のだしハ先規のよしにて左のごとし。

《図略（8頁）》

如図、上にサンのなき宮町組上下組は上のよし。さんのあるハ（瓦／組）其次のよし。奉納と認る（大伝馬丁 小伝馬丁）ハ又其次のよし。

○六月六日、児嶋備後といへる者召捕れける。此者もとは知多郡名和村の座にて、生得さかしきまゝに、いつしか高山権現といふを祭り、家を出て三十日四十日旅へ行、彼高山へ詣しなと云ふらし、後には家の内に神祠をしつらいまつりしか、繁昌大かたならず。追々名高くひろまり、後にハ他所迄も行連しかハ、あやしの賤か家にハ生業ももとかるくなり行て、其頃春日井郡古井村の八幡宮の社家のあきありけるを相続して、初て児嶋備後と名乗り、弥法を行ひ、加持祈祷ひまなく、其後故ありてかの古井村の住居成かたよしにて、新出来町相応寺より東へ取付の南側へ移り、大に普請し、彼折高山権現をまつり、繁昌日

にまして、希有の行者也と、道にくらき童蒙婦女門につどひ、宮前に額着て、其身の仕合不仕合或は一生の禍福を祈る。賽銭施物、口服を養ふに足る。斯広く行ひけるまゝ我慢増長して、こんくの狐の尾こそ顕れける。恐るへし、慎へし。過たるは尚及さるなるへし。廳にて被申渡ける書付の写

新出来町

西之宮配下

児嶋備後

右者、作意を以高山大権現と名付家内ニ祭り置、諸向へハ、奥州津輕郡帝釋天荒高山大権現と申ハ有無共不存儀、右高山ハ格別信心にて折々参詣致し候旨偽申触、手広く加持祈祷札守を与へ、或は医師の方角、名前、薬方等申聞、礼物を受、渡世に致し、余人の加持行れ候を厭ひ、自身の奇特を見せ、信仰可為致ため跡形もなき靈説奇怪を申聞、人を欺き、奥州高山にて見聞之趣ニ偽り、地獄極楽の体を画候懸物を拵、諸人に見せ、右体作意之高山大権現の社取建之儀、先達而願出候。今度吟味之節も偽之儀申立始末不届ニ付重追放可申付処清湛院様一回御忌御法会ニ付 御免被遊、

中追放ニ申付、他国他領住居致間敷旨。

六月

○六月十七日朝六時前々中之町堀切東北角、高木伝右衛門（寄合／五百石）屋敷焼失、外長屋高堀計のこる。

○六月廿七日夜、七間町一丁目より三丁目迄爪のあとあり。何ともしれぬよし。

○六月比、御深井へウハバミ出候由、見る者必相果候由。

○去年より、肥州より豪潮といへる天台律の僧来りて、萬松禪寺に在

て、准提觀音の法にて衆生を度し加持しける。去年丑の冬より四月迄、毎月八の日三日大に群集して加持を受ける人多し。五月に至り、府君御祈祷千座護摩をつとめられるゆへ、五月より八の日は停止二なりける。又、万松寺の山門外に、高三丈あまりの宝篋印塔建立ありける。是又彼師の大願にて、扶桑の内に八万四千建立の祈願にて、筑紫の彦山に三丈八尺の塔を立、西国に都合三千ほとをことし迄に建立ありけるとかや。後に知多郡岩屋村の巖屈寺の住職被 仰付けけるか、程なく柳原に新寮を賜り、巖屈寺ハ弟子を輪番持にせられける。文政八年の比方施薬などありて、大に群集す。四の日に施しあり。右ハ大坂の富家、菱屋喜兵衛といへる物施し候よし。文政十年より施薬相止、売薬二成候へハ、一向はやり不申候。

翌年卯三月廿六日、廿七日、廿八日

宝篋印塔供養の図

廿七日、廿八日両夜

千灯供養

此年より毎年盆中三夜千灯供養あり。施我鬼あり。柳原にても同断、毎年あり。

《図略（11頁）》

○六月、日置手代町に幽霊出る沙汰ありて、町内にて百万遍あり。且又萬松寺珍牛和尚江錢三貫文を以施餓鬼頼けるによつて、和尚承知あつ

て、一貫文我地内の宝篋印塔へ差上、壹貫文大須の塔へ遣し、残り一貫文にて大施餓鬼せられけるとそ。

○五月、日置くずや遊参船出来、初音丸と云。雪隠を付たり。桑名屋の船などよりハ又上物也。一日壹貫八百文ツ、にて夜五時限のよし。其後、岡崎屋恵宝丸出来、其外、喜宝丸などいへる同じ様な船出来、大ニ流行る。月見の遊興、芸妓繁昌の峠、此時なるへし。

○八月廿八日夜、戸田町嶋庄前に錢六貫かゝけ九把車二のせ捨有之。

○ことし、ミなつきの比とやらん。木曾の方にて相对死せし妓の書置のよしにて得たる写

あまり御なつかしさのまゝ、あらゝ書のこしまいらせ候。花の頃より一かたならす御世話さま相成まゝ、いか計りありかたくそんしまいらせ候。扱とよ、身にしたとも御存しの通、弥兵衛さんとふかくなれそめ、二世も三世もつかひはなれぬおし鳥の、末はとふせう、こふしやうとたのしみ居候ひしに、思わぬ人にせきとめられて、あまる思ひをわしひとり涙てくらすつれなさを、逢てかたるとまつ人に、久し逢たるそのときの心のうちは御すいもし、女心の一すしに、いつそ死んたらまししやかと弥兵衛さんに語り候ひしかハ、わしと死んてはおきくとやらへ義理たゝす、こよひおきくと死んで呉よといふたれと、わしへの義理を思ひしゆへ、心まよひて来りしか、切るにきられぬ三人か、前の世からの悪縁とかたりなんすに今一しほりしかおもひのますかゝ見、世間に稀なことなから、いきなからへてうき世のつミを見るよりも、三人ともにきへゆくつゆの心中立、とふそかくたのみますといふたれハ、弥兵衛さん

こゝろをさため、目にもつなみたおしぬくひ、二人かつれたち忍び出、おきくとやらもよひ出し、半兵衛さんのところにて中直りしやといふて、死出の旅たち、此世のいとま、三人共にくミかわす其盃に夜をふかしまいらせ候。わしや今死ぬる身しやおもへは、うれしいやらかなしいやら、みたれくしこころをハ筆にまかせて書のこしまいらせ候。なれとも、此弥兵衛さんのやうなしやうわると、そのうへ三人死んたらハ、此世の人の笑ひのたね、わらハ、笑へといふものゝ、おまへさんなどの御さしみ御はつかしくそんしまいらせ候。此うへは御なしみかへに、時々御さこう御たのミ申ます。又一ツには、旦那さま御内義さまへつもの御恩草葉のかけより御礼申て居ますと伝られ下され候。そうして郡内の里かくさんや遊子さんか御出なんしたら、是まてはいろく御世話になりましたか、まア死まずと御つたへ下されかし。其外の御こゝろ安き御方さまへ、よきに御つたへさせ御たのミ申ます。あまりの思ひにこゝろくらみ、むね一はいになりしゆへ、在所への文も得遣し申さす候まゝ、御たよりのせつ、ふたおやへ、さきたつ不幸ゆるし玉へと御申遣し下されかし。せきくるなみた、おしとめくしたゝめ候へは、あと先よきに御すいもし、もはや八ツのかねをきししゆへ、無常の風にさそわれて、心せきしまゝ、おしきふてとめ候。かしく

けふ

ひさふ

はる野さん

御もとへ

うきしつむ身ハ浮草の花なるや たゝ水いろの死出の旅立
○今年寅四月、吹立新規出来、式歩判六月より通用之旨
公義御触来る。

表《図略》(14頁)裏《図略》(同上)

厚五厘 縦七分五厘 横四分

目方一寸七分五厘

○八月十日朝五ツ半時より、前津長道行当り二町計焼失。

○九月十三日夜、枇杷嶋の百姓三百人ほと出来りて打碎候よし。
具行けるを、枇杷嶋の百姓三百人ほと出来りて打碎候よし。

○九月十三日、萬松寺稲荷社修覆棟揚、迂宮有之。同十九日、祭礼夜迄賑ふ。此節拝殿出来、翌春切通し出来、翌夏山門外より本道出来。

(朱書) 無三殿

○九月、尾頭橋欄干替る。十月、ムサンド橋直る。

○九月廿三日、熱田正選宮。前後大雨、期に臨んで快晴又大雨。右二付、翌朝

御名代中村又蔵(木御番頭格)(朱書 非也御用人ナリ)ノ千石)同廿五日衆有之。同廿四日、廿五日、廿六日馬の塔出る。

○十月十日、遠山彦左衛門殿家老沢田助左衛門賀養子藤八と申者、我妻の妹を殺し、十五日切腹、介錯ハ鈴木某(イ伊奈トモ)口伝。

○十一月、町奉行衆役宅出来上り、直ニ田宮半兵衛殿引移、本町割出し町役所南隣也。是迄伊藤次郎左衛門控を御引上ケ也。

○十二月十二日、渡辺兵庫頭殿 思召之筋有之、加判御免被遊差控之処、十九日御解。尾州江早登り也。此時諸役御年寄加判ハ、津田縫殿

殿（是迄本知七百石／御側大寄合定詰）新知三百石被下置、千石之本知二被成下、二千五百石之高ニ御足高也。此時悪口に渡辺家近臣安井某口伝アリ

赤染御門

安井とて買まし物を女郎受て かたふくうへの着を見し哉

来卯年大小

五八との遊所通ひに霜をたり 六二勤す四九しりにけり

其外狂歌澤山にありといへとも略之（但其四五首を／出す）

渡辺のかなけのとれぬ其先に こかねの釜をほり出した津田

おさまれる世の目出たさハ重代の やかて仲居か殿りそする

持鍵の身方出たる錆なれハ 朱柄ハ野となれやまぬ胴楽

側役の言を丈左と心得て 安井四六にはまるわたなへ

津田ハとる渡辺かへる世の中に 何とて揚屋つれなかりける

より政と綱と兼たる渡辺か 鬼もとらへす鶴も仕留す

○今度

章善院様の御事御解被 仰出候付、御下屋敷内に御祠出来、孚式大権

現と崇奉らせ給ひける。右二付十二月十一日江戸市谷殿中にて御能被

仰付候御番組

千歳 日吉平兵衛
翁 面箱 大倉弥三左衛門
三番叟 大倉弥太郎

老松 宝生大夫 宝生新之丞 万野市郎兵衛 金春惣右衛門
幸清次郎 一僧又六郎

八嶋 松本弥八郎 大曾根新兵衛 齐目七右衛門 梶川喜右衛門 松本信蔵

野宮 安田金三郎 宝生万作 石井弥市 観世新九郎 森田長蔵

安宅 金春八左衛門 高安源七郎 万野九郎兵衛 大倉長右衛門 森庄兵衛

祝言 金札 金春為三郎 石寺権平 大倉六之助 諸井源兵衛
高田平吉 雅二郎

末広かり 鷺仁右衛門
節分 大蔵八右衛門

八嶋那須 大蔵弥太郎

○十二月廿八日夜八半頃方東小屋不殘焼失。但し、寺と家三四軒残り候よし。

○今年十月

国君之御実母一橋家の御隠居様、御家江御引受に相成候付、其節の狂歌に 号乗連院殿（二條治孝公／御女）

川さらへ市谷かけて一ツはし

じやうれんわたすはいとうけとれ

○石河太八郎殿事、勝手困窮に付、願ニ仍而十ヶ年の間在所駒塚江引越、諸事勤事御免被成下ける。此節

万石て兵庫しくじる太八にげる

いつそたわけの小八かましかよ

文政二己卯歳

○元日終日雪ふり。近年希なる深雪也。門松ニつらゝ（尺余のつらゝ）下り見事也。二日より晴天、其後折々深雪多し。京□雪ニ而通路かたし之□
○去年よりの事共を挙て作れる狂詩七律二首を得たり。稲荷の隠居安井孫彦作のよし。

米価高下米演謀 文政二年文政優

（朱書）御用人

町奉行 田宮半兵衛

玄海悉焼乞食苦 市農権勢宮兼寺

赤門永閉大名愁 儒仏繁昌虎与牛

（朱書）渡辺

督学 塚田虎 万松寺 珍牛

（朱書）御用人

御勘定奉行 大道寺孫蔵

御側金銀拝借済 許多諸士勤年頭

又

（朱書）堅瀧川忠暁

横田宮半兵衛

莫言多米令金銀 上下融通大国民

立横木爪威勢盛 角切沢瀉世録新

（朱書）大代官神間茂平

三十俵被下、近比ハ希ナリ

（朱書）御当代

御小性ナトノ事

三十俵雪改易恥 一万石悲分散貧

（朱書）石河

町々芸子繁昌春

（朱書）アツタ飯モリ

○二月二十六日夜六半頃、巾下北鷹匠町辻番の角、元御鷹匠隠居高垣八郎平、不行跡ニ付召捕可申為、町方同心相越候処、手向ひいたし候

付、怪我人左の通。されとも、とふやらこふやら仕留生捕候由。

深手即死

繁野太十郎

浅手十三日日出勤

佐藤武兵衛

無疵

高取惣八郎

右ニ付、御褒美被下候付輕口に

シ子ノ太十郎

右、八郎平始末 被仰付品

佐藤ブチャウホウ

六月ニアリ

タダ取惣八郎

○正月十七日、京知恩院より圓光大師之像、南寺町光明寺へ着あり。講中轍を立迎ふ。先年葉栗郡極楽寺に法然上人三年在せし事ある由。今ハ寺はなくて、村の名と成しか、一年勢州松坂清光寺信囃上人、我府下西蓮寺にて法談の時此事を語る（朱書：摂州勝尾寺の記にあるよしを語）によりて、吟味して旧地再興の願済ありて、知恩院へ達しけれハ、僧正、奇特なる事也とて、花頂山最初の木像を写し仏ニきさませ并大師遺身の舍利と真筆の六字名号を添、奇授せられける故、葉栗郡の寺へ納り給ふ。其序に当寺にて此節開帳故、本町通行列して入る。到着之上読経あり。十九日方三日の間大に賑合、尤新規寺院建立ハ不相済故隣村大毛村に府下大林寺末禪宗無住の地ありしを譲り受、大毛村極楽寺と改、再興あり。本堂本尊阿弥陀仏も新規彫刻して知恩院より給ふ。廿三日大毛村へ入興。宮様より金子百両賜りしと云々。
○正月十七日、東寺町常題目本立寺にて、本堂再興成就入仏供養あり。廿一日迄朗師五百遠忌執行。同日同所本住寺にても同法会執行。
○二月八日初午あつた元服再初る。近年、奉行方停止之處、今年より又初る。

- 三月十八日、桜の町清水寺三十三体之観音成就、移徒。此節本尊開帳中かた／＼大賑合。当日餅投あり。
- 熱田舞樂廢し居候処、近年御再興ありて年々有之候処、当年方本式の御神事ニ相成、毎年三月十五日ニ定る。
- 三月廿五日、幸心村庚申開帳中本堂棟上。
- 同廿八日、あつた本遠寺立像釈迦如来、桜之町通所にて開帳ニ付、今日已之刻過入興、幟多く見事なり。四月朔日方一七日開帳。
- 同日已之下刻、南寺町極楽寺江京本山栗生光明寺方圓光大師木像入興。本町三丁目京屋にて小休、夫方昼比入興、是則、葉栗郡の極楽寺旧跡を移したる寺ゆへ目論見しよし。門外ニ牌を立、面ニ圓光大師安居遺跡とするす。四月四日方十日迄別時念仏執行。入仏の像開帳、永観堂方大師真筆の弥陀画像六字名号令拝見、大師金（朱書）真骨舍利も当寺ニ納り金塔に安置す。閏四月八日方禪林寺上人垂誠有。
- 四月八日、熱田大宮江九尺の織物の絵馬奉納、競馬の図なり。画工ハ玉溪、書ハ尾頭備、織物師ハ神樂殿に納る。
- 四月廿三日、大須大塔櫓つき門前町より築始。
- 海東郡戸田村山田源治、はやて除施葉杉の町筋伏見町東へ入北側、和久屋伝七方にてほとこす。
- 閏四月朔日方三日迄、精妙寺什物、兆殿司涅槃像損し物修復して供養あり。
- 同四日申刻、広小路神明神主宅風呂焼失（直様／鎮る）。
- 同月廿三日、熱田田嶋祭主にて大々神樂執行。是、社家の宅にて執行

の初と申事也。

- 五月四日、雷鳴大風雨。京町通東向幟竿大分折候よし。通り物ある共云。

- 十四日、久屋町一丁目少々火事。

- 五月廿五日、甚目寺鐘樓建立成就して、今日五半時法用、一山衆僧集會。四時工匠上棟の式あり。投餅、酒を参詣の諸人にすすめ賑合。

- 五月廿八日、大雷雨。佐屋辺大水。此日愛知郡山崎村江雷落馬にて二軒焼失のよし未詳。

- 江戸保己檢校、群書類聚全備して又其統を撰んとす。是によりて、諸国の珍書を索んとて名府へも来り、熱田の日本紀を一見し、大須の古書を吟味し、此寺の珍書ハ大半写して入度由、先月より筆工大勢集りて写し日々あり。寺社方下役も出席し、方丈にて模写す。此外河村氏藏書、又琵琶嶋青物問屋市兵衛所持の藏書も写し候由。

- 当夏、喧々たる巷節一般ニ流布す。其図如左、大同小異の説まち／＼なり。

名を神社姫といふ。竜宮よりの使也。長二丈余、腹赤く紅のことし。当四月四日、九州肥前の国浜辺へあかり、同国八兵衛と云者生捕けるに、神社姫云様ハ、我は是龍宮よりの使也。当年より七ヶ年の間ハ豊年なり。去なから、コロリと云病流行す。今、我姿の図を見る時ハ、右の病をのかるへし、これ則神のおしへ也と云々。

（朱書頭注）矢場にて人魚の細工物を売
《図略（21頁）》

○小判壹歩判吹替被

仰付、六月触有之。九月廿日方通用す。

○今年、町芸者役所へ書上候由之写

建中寺前	せい	さいや町	あさ	同	小てつ	前津ふじミ	まき
住吉町	その	住吉町	さい	裏橘町	八重	同	きぬ
住吉町	きぬ路	長嶋町一丁目	すて	長栄寺前	やえ	梅香院前	とふ
桑名町一丁目	つい	同二丁目	きく	出来町	市太郎	八百や町	久五郎
さいや町	浅江	桑名町三丁目	友つる	大久保見町	喜六	橘町裏	藤吉
伏見町一丁目	千代つる	桑名町三丁目	ゑい	矢場	磯吉	志水	大清
伏見町七丁目	はる	同	もと	志水	三江	九十軒町	五左衛門
裏門前町	あい	門前町	のふ	するか町	嘉右衛門	するか町	金五郎
日置小川町	しけ松	住吉町	こう	同	源蔵	山田町	弥兵衛
七面横丁	ゑん	小田原町	りき	いせ町	清蔵	こふく町	金蔵
大津町	こと	広小路	れい	富澤町	新七	同	半兵衛
八百屋町	京	呉服町七丁目	きし	住吉町	清兵衛	同	久兵衛
さいや町	みさ	富澤町	きくの	同	平八	同	善七
同	あさ	住吉町	八重次	長者町	又右衛門	八百や町	弥兵衛
同	小つる	同	ゆか	同	万吉	いくら町	新蔵
矢場町	まち	同	まり	みその町	平正	同	丈助
門前町	やす	桑名町	ちの	小桜町	伊八	杉の町坂上	彦左衛門
同	小てふ	桑名町一丁目	はる	巾下	小兵衛	益屋町	安兵衛
同	いと	ふしみ町七丁目	なミ	伝馬町	万吉	広井村	小十郎
日置坂上	とも	ミその町三丁目	りう	門前町	小兵衛	橘町	清七

女芸者
べ四十七人

日置手代町 茂平 日置 徳まつ
 是より以下は 芝居はやしかた
 日置 庄吉 同 伝左衛門
 矢場 柳治 裏橋町 梅六
 大津町 清蔵

ベ男芸者四十一人

男女芸者凡八九十人。名府奢侈分限をしらず。只遊興一般の世なりけり。貧しき匹夫一女子を得て、忽ち富を得る、希有の世なりけり。今年よりハ来年、来年よりハ其翌年と増して芸妓の人数挙て数へかたくなる。

○三月十九日朝、御堀にて相对死の者あり。男は式十七八、女は式十三のよし。

○二月比、三之丸病犬ありて、人を怪我さする事数多し。終に犬落しに入候由。

○四月、広小路神明にて北野天神開帳。四月の廿五日方閏四月十五日迄なり。（先年古渡ニて有し時方ハ神宝少しとそ／此度の神宝の内、御一代記絵巻物ニ巻古雅也。）

○四月廿八日より駿河町西蓮寺にて嵯峨釋尊開帳二七日が間也。殊之外繁昌也。

○四月方五月に至る迄、乾の方に稲星出る。

○四五月比、屋根虫わく事一般也。もちの直段あがる。

○五月十五日、十六日馬の塔出る。辰巳櫓にて

上覧あり。十八日の筈なれ共、当年ハ十八日、十九日の両日 清湛院

様三回御忌御法事、十七日には御茶壺通行ニ付如此。

○今卯春より阿弥陀寺裏門（石切町／行当り）通りぬけ出来しける。元来右のことく致候ハ、賽物なども少しハ多く取り申へきやとの目論見なりしに、さしてかわる事なく通りぬけるのみの事なりし故、二三年過て裏門を閉て置。

○一兩年朝顔の流行甚しく、いろ／＼の花葉異なる品数種限りなし。人好む事甚しきときハ、草木又珍品生ず。奇なる事なりけり。五月廿五日、玉屋町聞安寺にて会あり。珍花珍葉不思議の品をかさる。六月四日も又あり、其外所々にて会ありけるよし。三年計にて一向すたり朝顔を作る者希なりけり。

○六月廿三日

隠居

高垣八郎平

其方儀、行作不宜趣追々相聞、去々年御咎被 仰付候処、其後も不相慎理不尽之所行相聞候付、去年蟄居被 仰付候。然処、其以後も不慎候付、頭筋方申立候品有之、為取締差向候町奉行同心江為手負、殊ニ右疵ニ而相果候。右ハ親類共之不取計方無是非右之次第ニおよひ候付、彼是申立候品有之候へ共、其段者難相立、始末不届ニ付死罪被 仰付候者也。

（朱書）天保六未、被召抱、（小普請組被仰付、其後 御鷹匠被仰付候、其節嶋ニ妻子有之、唐船の謡曲のことくなりしと云々。

小普請組 八郎平養子実弟

同姓伝兵衛

養父隠居、同姓八郎平不届之儀有之、死罪被仰付候付、流罪被仰付旨

御広敷詰 八郎平伯父
青木平大夫

惣領
同姓熊次郎

不束之儀有之、逼塞被仰付旨

小普請組 伝兵衛弟、八郎平弟
山本助作

文言同断

右親類者、いつれも五十日の逼塞にて御免也

○六月十二日昼八半時頃大地震

(朱書)
石塔并石灯籠多く落
木々の蟬鳴止、瓦疵等多く落
水溜水壁等の水より出し
小便瓶の小便より出し
東寺町常德寺の門ころび

(朱書)
西懸所矢来門、南の方馬繫へ倒。若宮北築地大ニ崩。在にて、大松地へゆり込、一丈計出居候所有之。地震泥ふき出し、田畑分らぬ所も有之。東寺町常德寺門崩、八事塔損し、七寺塔アウチくるく廻り、漸無事也しか、茶屋の者甚驚候よし。桜天神時の鐘落しと言ハ虚説ナリ。

此度程の地震ハ百七十年目程のよし。先年本町大手石垣壊れ候節ハ、是程ニはなかりしよし。

御城下中ハ、土蔵を始損所数限りなし。壁落、鴨居おち、大木おれなといたし、物忌なりけり。就中西辺程強きよし。濃州カナマハリ村皆受寺（一向ノ宗）にて、客僧加州靈親と云僧法談ありし休の内に、此地震にて堂くづれ、即死廿三人、半死半生三十人程にて、一両日過て死候者共四十六人。其内鵜取村西覚寺、高畑村長久寺死候由。其外、多度辺惣潰之由。

(朱書分ち書き) 伝馬町火の見上番人見候へハ、町々の屋根、浪のうねることく、其内に瓦の落るもあり。おそろしき事のよし。前夜、心宿星月をつらぬく、前表のよし、此後一兩日銀河見へすと言。小田井問屋町の内井戸、此地震にて濁りしゆへ、淺し処大なる鮑浮出。六字名号蓮如の二字ありしと沙汰す。此比、白鷺空に舞沙汰あり。大地震、大雷ニ付、町々御日待し、秋葉へ代参を立、七月朔日あつたに参り、格別賑合。七日あつた御祈祷被 仰付候よし。

○六月十五日夜九時方大雷大雨ニ付、片端朝祭十七日に濟、若宮御車ハ十八日引渡し、辰巳櫓にて

御覽。天王前にて丁ちんをともし引出し、本町大手引出し候節五時也。珍しき事也けり。

○六月廿一日、巾下押切十六屋の娘きられ候よし。

○六月、山王裏にて子ころしあり。

○六月廿六日夜五半時比大雷鳴、数ヶ所へ落申候。承候分左之如し。雷落候所

一呉服町京町角井筒屋伊助（油ノ屋）の所へ一ツ落申候。

店之者一人ハ片肌ぬき、一人ハ丸裸、一人ハ足をまくり候所へ落、裸の者か五六日目ニ死、片はた肌ハ七八日目に死、足まくり候者は助り候よし。

一 御園下御城代組伊藤源兵衛宅へ一ツ

此家、戸障子しめ居候所へ落候而、家内中引かきまわり候よし。銃炮二丁二ツにおれ候よし。

一 横三藏筋庵原仁左衛門屋敷へ一ツ

一 伏見町筋かはやき町下ル西側、利吉と申者裏へ一ツ

一 日置生駒殿控屋敷へ一ツ

一 同南隣、野崎一学殿控屋敷へ一ツ

一 同所裏廻り田面六ヶ所

一 魚之棚呉服町東へ入藍や平助へ一ツ。一人死

一 橘町崇覚寺玄関へ一ツ（召仕の男氣絶／後につんほに成）

一 広井水車笹宗控蔵へ落、大豆、小豆、米等少々焼損し候由。しつまり候後、火事沙汰にてさわく。

一 東寺町長栄寺門前へ一ツ

其外所々へあまた落、大概十九ヶ所程之よし。翌日も鳴りツメなり。

○同月廿九日夜、又大雷、夕六時過より四時過迄也。

一 桑名町筋、石井九郎左衛門屋敷へ一ツ

一 埋御門外御土居松かきミしり

一 光音寺村田中へ一ツ 一 納屋八角堂へ一ツ

一 保田大船へ一ツ落、船一艘焼失

一 あつた羽城へ一ツ よい歌を誰そよんたりあめつちのしきりにうこく地しんかミなり

一 山崎村、家一軒焼失

一 横須賀、家三拾軒程焼失

一 前津之内、松前屋吉兵衛控へ落、二軒焼失

○七月、熱田御芦蔵の前と云所也。大ひに賑合、芝居などをなす。（朱書 盆天少々あり。）

○七月十四日、十五日、十六日万松寺宝篋印塔千灯供養。廿四日陀羅尼塔花供養。

○七月十六日、五条橋普請皆出来、今日方通る。盆中普請不休。（朱書 七月十六日毒ふると云説ありて、人おそれる。）

○七月十八日、中下正覚寺堂再建の地築棒にて、同所の今年六才に成候子つかれて死申候。十九日二寺方葬礼し、和尚分八人出候よし。

○七月十四日、高田真行院江勢州一身田方親鸞聖人五十四寸の木像来る。廿五日方廿八日迄開帳。

○此比、大變つくし。（朱書 七月廿八日／国君御遊船、雷鳴あり、夕方晴る。）

大雪や大豊年の今朝の春 大名衆にたてぬ門松

大塔の地築の音の長閑さに 大山事の大寺の加持

大騒動屋根虫のわく名古屋中 大きにはやるコロリヲツトセ

大むかしゆるぎしまゝの大地震 大雷に怖る二夜夜サ

○八月二日、非人清吉火罪。是ハ去冬月迫玄海に火を附候者也。生所ハ岐阜にて医者のよし。辞世の三十一字あり。尤愚拙といへとも、身分相応ゆへ左に誌す。

年々にぬすみたためたる芝新 今朝のあらしにたつた一くべ
生れしも死ぬるもおなし紙幟 鐘馗はなふて鬼の道連

其余略之。

○八月朔日より二七日の間、阿弥陀寺にて紀州道成寺本尊開帳あり。緑起の写浮屠之妄説可憎之甚也。

抑、紀伊の国日高郡吉田村道成寺と申すハ人王四十二代文武天皇の御建立にして、本尊は御丈壱寸八分にて、閻浮檀金の千手観音、海中より出現し給ふ所の靈像にして、殊に蛇身化益の御誓靈驗新にましましては、都鄙の参詣常に絶す。境内広大にして、本堂、楼門、庫裡、鐘樓、経藏薨をならへ、莊嚴又金玉をちりはめ、凡そ千百余年の星霜を経るといへ共顯然たるハ、是関南第一の靈場也。其来由を尋るに、古へ此辺りに正八幡宮の社あり。此社と道成寺の間二三町の入江にして九海士の里とよひて、九人の海士人住り。或時海中に光り物あり。蜃人あやしみおそれてちかつかす。一人の蜃ふしきに思ひて光る所に至り、海底に入てさくり求るに、つゐに此赫奕たる靈像を得たり。蜃人奇異の思ひをなして、壬生といへる所に柴の庵をむすひ安置し奉り、朝夕の恭礼いとねんころなりけるに、或夜靈像夢中に日く。汝、我につかふる事他事なし。汝心に願ふ事あらハ申へしと。蜃人答て、別に願ひ申事なし。只一人の娘を持侍る。今に至りて頭髮生せず。あわれ大悲の仏力を以て頭髮を生せさせ玉ハるへしと渴仰すると見て、夢覺たり。奇特なる哉、翌日方娘黒髮生して程なく丈にあまれり。蜃人觀喜してその髪を落しを一筋も人に踏せしと、一々拾ひて樹の枝にかけ置けるを、雀来りてふくみ去り、遙に帝闕に至りて紫宸殿の軒端に巢をかけたたり。或時帝叡覽ありて、女の髪筋雀の巢方たれて地上にとしく事ふ

しき也とて、彼巢を取らせ見給ふに、女人の黒髪に紛なし。則、此髪のぬしを尋よとの宣旨に仍て、普く国々を尋求るに、遂に紀伊国日高郡吉田村九海士の里に至り、彼髮主を尋得て都にかへり、其由奏聞しけれハ、後の宮に備へさせ給ひける。世に稀なる美婦人なりける。しかるに、后、雨ふる日には必玉顔に涙をたれてものかなしき風情に見へ給へハ、帝怪しミ其故を問給ふに、后對ていわく。我古郷の柴の扉に安置し奉る觀音あり。雨の日には庵室漏て濡させ給はん事を歎き申なりと、始終を語り給へハ、帝叡感ありて、扱も難有仏体哉、さらハ一字を経営まいらせんとて、紀の大臣道成公に仰て七堂伽藍を御建立あつて、天音山道成寺と号し彼靈像を安置して九人の海士人をも神に祝せ給ひ、九海士王子と崇めて今も吉田村に宮居ありて、例祭絶す。諸人は是を尊敬すと云々。

○道成寺縁起に對て一ツの物語あり。人王六十代醍醐天皇の御宇、奥州白河といへる所に安鎮といへる僧あり。常に三熊野を尊信し、山伏の姿と成て同国宝の郡真砂の庄司か方を宿として、毎年此所に宿しける。此庄司に一人の娘あり。名を清姫と呼て幼稚の比方容顔麗しく、ことに怜利なりけれハ、彼僧いとおしミ戲言などいひて、後には妻ともなして奥州へ具し行んなると言けるを、娘ハ稚き心に誠と思ひ、いとうれしけにいなむけしきもなかりける。是を惡縁の始とハ後にそ思ひしられる。扱延喜六年八月の事なりしに、例年のことく庄司の許にやとりけるに、清姫夜ふけ人しつまりて安鎮の閭に忍ひ来りて言やう、わらハもはや十三才に及へり、いつ迄かくて置給ふや。此度は

是非に具して陸奥へ下り給へとかきくときて申にぞ。安鎮は、よしなきたハふれことを言し事よと後悔すれ共色にも出さず、一まつたはかりて見はやと思ひければ、いかにも今年ハ具して下るへし。さりなからいまた参詣を遂されは、必下向を待給へと言すかして庄司の許を立出るに、娘ハ門おくりして一首の歌を詠す。

先の世のちきりのほとをみくまのゝ

神のしるへもなとかなからん

と紙に書て出しける。安鎮心の内にはおそろしと思へ共、返歌ならてハいかれる事もやとおそろし

三くまのゝ神のしるへときくからに

猶行すゑのたのもしき哉

と詠して、頓と下るへしと云すて別れける。夫方、清姫ハ指を折て安鎮か下向をまつといへ共歸り来らず。あまりに待わひて外もにいて、行共なくかへるともなくさまよひ行に、先達と覚しき老僧等に行逢たり。娘問ていわく。ミつからか尋る人ハ若き僧にて侍るか、手箱を取て逃候か、若左様の僧に逢給わすやと云。老僧のいわく。夫は七八町跡にて逢し僧ならんと云、今一人は十三町も行ぬらんと云。娘思ふ様、扱は我をたはかりにけたるならん。いつく迄も追付ん物をとつふやきつゝ飛かこつく追て行。其様いとおそろしく、旅ゆく人も是を見て、扱もすさまじき女性のけしき哉とて、何ゆへかくいそき給ふそと口々にいへ共、娘更に耳にもきゝ入す追かける。夫より切目河といへるを打渡り、上野といへる所にてやうく追付声をかけけるに、安鎮心中に権現を念し、爰を専途と逃たりける。此文の功力に

よつて娘の眼くらみて、石に腰をかけ息を休て居たりしに、首より上は蛇と成て、夫方娘は天田川迄追来るに、渡し守ハ安鎮に頼れて渡さず。娘弥いかりて川へ飛入渡りける時ハ、はや惣身蛇体に成渡越て、夫方道成寺に至り、安鎮か足跡を嗅て終に安鎮を隠せし釣鐘を七巻まきければ、鐘ハ湯と成て安珍も灰と成り、蛇ハ則道成寺を出て入江にしつミ死しけるとなん。此ものかたりハ三歳の児もしる事なれハ、略して具に記さす。ことに此事ハ謡曲今様に謡ひ、戯場の舞台に顕然たれハ、見ん人は彼を通わして其真偽を正し給へと云々。

○八月上旬、高木八郎左衛門殿家来、久野屯と申者、一両札、五匁札を作り入牢。屯儀桑名へ逃行相果候よし。始末不相分。

○八月廿九日、日の出頃方、東小屋又々火事あり。

○八月廿五日、九月二日、矢田合図火地雷火等あり。

○九月廿五日、岸上某（山王裏／手代也）の妻（とよと云）出斬打首。右は元来岸上某事先妻の腹なる娘（みちと云）あり。此娘の乳母、妾のことか成て居ける（則打首／の当人）か、先妻死して後后妻のことか成、男子一人を生してより殆悪念発起して、つゝに娘をうしなひける科なりけり。

○七月廿八日、東懸所へ大虹梁の檜（朱書…ケヤキ）（長八間／中四尺）堀川木場方引。昨廿七日木曾川方堀川江着、東の河岸へ上ておから車二輛に乗せ、新橋角へ引下し本町筋江出、町々在々講中職をさし先に立、両綱長さ三町余、信心の男女引之見物大に群集す。道々辻商人さまく出る。此車の跡方松板を積て引。是ハ道の地型高下の所へ引て通す為なりとぞ。

（付紙・木曾川材木流）

○八月三日方七日之間、福德村聖徳寺にて皇太子千式百回開帳。

○八月、久屋町一丁目全泉庵ニ金毘羅社建立。段々繁昌す。秋葉も後ニ勧請す。

○九月十七日方蒲焼町真広寺にて、甲州杉の御坊御箸杉親鸞聖人尊像并靈宝弘通。

○九月廿八日、東寺町妙蓮寺へ小湊誕生寺日蓮上人尊像到着。十月朔日方十三日迄開帳、大ニ賑合。

○十月、南寺町光明寺にて徳本行者一周忌あり。

○同月五日、清須山王ニ豐藏門と云神門建立。手斧初。

○十四日方小湊の貫主堀川聖運寺にて、五日之内説法あり。

○同月廿一日、光り物西を通る。

○十一月十日方二之宮富突、広井八幡へ持出し興行。毎会大ニ賑合。

○此節の米相場、兩ニ老石五斗六升三合かへ

古米白 百文二付 貳升

小売 新米白 同 貳升七夕

餅米白 同 老升六合

○右の通りの相場二付、諸色引下ケ候様御触あり。

十一月八日方

うとん 十五文ツ、

春日野 四拾五文ツ、

あまさけ 五文ツ、

豆腐 一丁五文 貳丁九文

あふらあげ 二ツ三文

小牧町味噌屋某、御触之趣ニ付雇敷役所へ参り、私方品々ハ、米直段高直之頃作り込候間下ケる事不相成と申ける。即刻役所方町同心行向ひて、右の者の蔵に封印を付、米直段上り候迄売事不相成と申渡しけるにそ、大に込り候よし。

○今年七八月頃迄、（老々ニ付）錢百十八文位方百貳拾文迄の所、八月末方段々上り、十一月頃ハ老々二百三文程也。綿ハ兩ニ四拾五斤六斤程、水綿は五十斤程も有。

評判

金かわる米ハ安なる錢上る もふ此上〔歌〕に下の苦ハなし

乞食に出るも出られず侍は 安ひ米さへたと得くハす

梅か枝にあらねと今年さふらひハ 何に付ても金ほしやのふ

町人もやつはり徳はなかりけり かけかとれぬと兼て思へは

日雇取ハ定て金かたまるらん 廿四文てくひ物はあり

米価安直古来稀 百文二升買得帰

勿言豊年如糺糴 乞食腹満惣身肥

大坂うかりの月

うしと見し四合のむかしなつかしや、おもわぬ金を引かへられて、今ハこのまぬ式歩の判、しのひてかわん又ハ錢、こんな米直か唐にもあり。武士なら江戸のやしきなら、めしもくハすにおりやせん。

○十一月晦日。水野藤兵衛殿中間、借馬に乗候処、北江かけ出し行候に、辻番前に野村良吉方長屋の子馬ニ蹴倒され、顔すりむき半死半生

の由之處、助り候よし。

○米価下直打続候付、武家難渋ニ候付、色々の御容赦筋あり。則、左に誌す。右の一件ニ付、小笠原三九郎殿（大寄合持席／大御番頭）御老衆江配下等之儀色々願被申候處、大御番頭御免相成候。右ニ付いろくの評判あり。大番組の内小笠原の組五十人、瀧川豊後守殿宅江切入なと云諷評ありけるに、御役義御免之十一日目に帰役被仰付けけるによつて事なく治りける。右ニ付、色々の悪口書等あり。今除之御容赦筋左之通。

御家中之輩勝手困窮之上、打続米価下直旁諸拝借金返納方難渋之趣相聞候付、格別之訳を以当卯年方諸拝借金都而不及返納被下切ニ被成下候

但右之通ニ付、当暮諸役所江返納相済候分者、追而割戻可相成事

一御小納戸頭取取扱候御金筋者、別段ニ候事

一御切米御足高等仕送り候米屋共方借用いたし置候金銀并知行所物成取締を以、百姓町人等方是迄之通借用之金銀共以来無利五十ヶ年賦返済可致候。尤、其段金主共江も為申渡候事

十二月

御家中之輩勝手困窮之上、打続米価下直旁難渋之趣ニ付、御側寄物金借用罷在候輩、末々迄各別之訳を以当卯年返納方年延被成下等一右之趣ニ付返納相済候分差戻之儀、多数之事ニ付来春迄追々可差戻候。請取方之儀者、御小納戸役所江問合可有之事
一当暮調印済之割符書付、此節差出候事

十二月

右小割之儀ニ付、翌春左之触アリ。

御切米御足高等手形相渡并知行所物成取締御代官判物相渡、金子借用致置候分、旧臘相触候以前返済取計候得者、返済切返済不致分ハ、五拾ヶ年賦ニ返済可致候事

一当春分御切米御足高等手形相渡、右触以前金子借用之分者、無差別五十ヶ年賦ニ返済、手形ハ取戻候事

一但以来共手形（住おくり）申付候ハ、手形相渡可置事

一五拾ヶ年賦之証文、金主江相渡候上物成取締、判物ハ不用ニ付借主江取戻候事

但五十ヶ年賦証文、金主方御代官、御藏奉行へ差出、締り附候事
一旧臘触以前迄之滞利足者、元金江差加、五十ヶ年賦ニ五十ヶ年賦ニ取計候事

一知行所物成取締者、以来不取計候事

一前頭金主共江外方借入金之分にても、御切米御足高手形取締判物預置候歟、又者、都而手形面ニ御家中仕送り并取締ニ而御家中貸之為ニ借用いたし候との訳書頭有之分者、五拾ヶ年賦返済可致事

一祠堂金等之類、右金筋之名目、証文面ニ書頭し有之分者、取締之儀相解、祠堂金等之名目書頭相對借用之手形ニ引替可申候。尤、右名目証文面ニ無之分者五十ヶ年賦返済可致事

一右ヶ條之通二者候得共、借主金主模通ニ付、双方共納得之上者可為相對次第事

一右書面ニ而決しかたきヶ條者、其筋々江相伺可申事

○五月朔日、木下正三郎（御役者／観世流）倅重太郎扇びらき能あり。
○五月五日、あつた馬の塔、本馬ハなし。俄馬ハ多し。曲馬、籠細工の趣向よし。

文政三庚辰歲

○二月廿八日より五十日の間、荒子村静海山観音寺本尊圓通大士開帳。

（朱書）

○正月十七日夜、わたや町下、方弥主郎組焼朱

○当春主田はしか流衍

○同頃より天道山光照寺開帳、每なから大に賑ひ、日々の群集おひたしく、鳴物を用ひ陽気筆に尽しかたし。勝に乗て駿河町通を大騒ぎにて我町内く迄、三味せん、太鼓或はすりかね金盃の類をたたき帰ける故、つゝに市中鳴物不相成旨触出る。去ながら、松原までハ替る事なく大さわきにて、喧嘩なども折々有之候由。

○同時（高田）粟葉師開帳あり。

○東輪寺に大仏造営の願濟、近々宮候由。籠にて張貫候よし。六月、地形場所定の式あり。末二誌。

- 惣高凡九丈余
- 御光八尺余十三体
- 御丈五丈六尺
- 目長サ四尺六寸
- 御ぐし長一丈六尺五寸
- 御口四尺九寸
- 髪毛五尺六寸
- 耳長九尺三寸
- 鼻の廻り四尺六寸九分
- 同ひろ丈耆丈
- 同穴の渡り耆尺寸
- 白毫一尺三寸

- ちほつ長サ一尺二寸
- 御足の裏耆丈
- 同渡り八寸
- 同中指二尺三寸
- 御手たなこいろ六尺
- 蓮華の長さ耆丈耆尺
- 御手中指長五尺三寸
- レンゲ花ひら高サ五尺三寸
- 同めぐり四尺五寸

右志之者、法名俗名等并忌日等記し、一靈土一所ツ、にて入る也。

○二月より中嶋郡妙興寺村妙興寺宝物弘通有。

辰三月六日朝六時より神野仲雄、亀谷好因、長谷川成憲等同伴にて中嶋郡市宮真清田大神宮江詣、夫方同郡妙興寺村妙興寺此節宝物弘通の事なれば、是へ立寄一見す。誠に奇代の霊場也。張州にあらんもの、一度ハ參詣すへし。略縁記、什器の目次左に書付侍る。

尾州中島郡長島山妙興報恩禅寺略縁記

原夫当寺之開山圓光大照禅師ハ、嵯峨天皇第十二之皇子河原院之後胤、当國中島ノ城主中嶋藏人之家ニ生ル。幼シテ奇才世ニスクレ、成長シテ出家シ、法ヲ大応国師ニ嗣ク。而后当寺ヲ建立アリ。或時熱田ノ宮ニ詣玉フ処ニ、回向ノ築地神祠ノ破壊スルヲ見テ尽ク修治シ玉フ。是ニヨリテ大宮司入道常端ヨリ社領ノ内鈴鹿ノ郷ヲ以当寺ニ寄附セラレ、猶又彼太神宮ノ託ニヨリテ十株ノ梅ヲ当寺ニ移シ植玉フ。是ヨリ開山塔ヲ十梅院ト号ク。四百年ヲ歴テ二本ノ老樹ノコレリ。今ニ至テ、寺内禍福ノ変アルトキハ、コノ梅時ナラサルニ花咲、葉ヲ生ル。靈木ナリ。昔、弘法大師熱田ノ宮ヲ修シ玉ヒテ讖候文ニ曰、却後七百年重修ヲ加フルモノアラン、是則我再来也ト。或トキ又一ノ宮地藏寺ノ住持観勝ト云人入定ノトキ、神童来テ観勝ニ告テ曰、弘法大師

来レリ。速ニ出テ拝スヘシ。觀勝走り出テ見ルニ、唯大照禪師ヲ見ル。彼神童則禪師ヲ指シテ曰、是則実ニ弘法大師也ト云終テ神童化シテ見エス。此外ノ奇端、祥ニ記シ難シ。略シテ其概ヲ知ラシム。尚禪師ノ行状ヲ祥ニセント欲セハ、来テ本記ヲ詳ニセヨ。

○抑、当山ハ 後光嚴天皇勅願之道場ナリ。尔来無二丹誠ヲ抽テ万歳之宝杵ヲイノリ奉ル。附テハ又天下太平、五穀富饒、万民和樂ヲ祝スルヲ今ニ至テナヲ嚴密ナリ。蓋、寺之布地ハ三十三町六段二百八十歩、勅ヲ蒙リテ久我内大臣、右大將源通相卿ノ寄進ナリ。貞和四年戊子権興シテ、貞治四年乙巳ニ移徙ス。勅ヲ奉テ寺ノ位ヲ諸山ノ列ニ準ス。但シ、寺領八百余町当国第一ノ七堂伽藍ノ靈地ニシテ、額ヲ國中無双ノ禪刹ト勅シ玉フ。妙興報恩禪寺之額ハ征夷大將軍義教公之台筆ナリ。猶又免除地ナリ。既ニ諸堂落成シテ目クルニ十境ヲ以ス。一ニハ覺皇宝殿、二ニハ無礙閣、三ニハ法雷堂、四ニハ選仏場、五ニハ薈葡林、六ニハ明暢、七ニハ唱山、八ニハ雲水閣、九ニハ漸入佳境、十ニハ宝所在近ト云。常ニ、二百余員之衆僧ヲ安シ、法幢稍昌也。嗚呼、物換リ星移リテ四百歳ノ今其名ヲ遺セリ。タマ／＼一字ノ大仏殿アリ。向ニ云覺皇法殿是也。青雲落成ニアラストイヘトモ、其巧タルコト世ニ希有ニシテ、我朝六十余州ニ声ヲ得タリ。来ル人感シ、往ク者感セスト云ナシ。其余ノ遺跡語ルニ遑アラス。今暫ク其大数ヲ取テ、記シテ以テ人ノ卷舒ヲ省。

○尾州中島郡長島山妙興報恩禪寺靈仏靈宝目錄

△ 総門

勅額 國中無双禪刹

△ 勅使門

長島山 唐筆

△ 山門

寺号之額 当寺大檀越足利義教公台筆

△ 仏殿

本尊釈迦仏 左 普賢
右 文殊 大宮形

持国天 弘法大師作 多聞天 伝形大師作

張大帝像 左 靈沢大電王
右 大權修理菩薩

達磨大師 左 圓通大応国師
右 圓光大照禪師 普庵禪師 画師不詳

涅槃像 一幅 釈迦八相曼陀羅

△ 開山塔十梅院昭堂

開山圓通大応国師生前頂相 開山圓光大照禪師生前頂相

地藏尊 定朝作 孔雀香炉

明朝製南禪寺
慶甫和尚寄附

列祖ノ画像三十三幅対

△ 客殿

○如意輪觀音 定朝作○文殊大士 同作○弁天 行基作○韋駄天 運慶作
○阿弥陀仏 慈覺大師作○不動明王 弘法大師作○觀音大士 安阿弥作○
仏舍利○足利尊氏公髻觀音（義教公ノ御奉納）○無垢淨光塔○後光嚴院
御宸筆一幅○後奈良院御宸筆一○後西院御宸筆一○開山禪師号稱光院
皇章御宸翰一○開山大応国師墨蹟一○開山大照禪師同三○当寺年中行

事一〇開山行狀付妙興寺之記一〇當寺寺領目錄一〇大唐諸伽藍之図二
 〇中興圓明國師自贊像一〇同墨跡一〇夢窓國師墨跡一〇大宋閑極法雲
 和尚同一〇南禪寺寧一山和尚同一〇永平寺道元禪師手跡一〇大徳寺澤庵和
 墨蹟一〇同花押之端清嚴和尚奥証一〇一休和尚墨跡一〇大徳寺澤庵和
 尚同一〇同清嚴和尚三〇同乾英和尚同一〇同天祐和尚同一〇同玉舟和
 尚同一〇同天室和尚同一〇同堅峯和尚同一〇圓覺寺春溪和尚同一〇建
 長寺古劍和尚同一〇東福寺笑隱和尚一〇建仁寺天隱和尚同一〇大宗
 派図虎関和尚筆一〇慶甫号建仁寺九淵和尚筆一〇諸山疏圓覺寺策彦和
 尚筆一〇悟溪大和尚草書一〇仁濟和尚草書一〇束陽和尚墨蹟一〇特芳
 和尚同一〇雲居和尚同一〇愚堂和尚同一〇無難和尚同一〇独立和尚同
 一〇至道庵主道歌一〇六字名号弘法筆一〇同法然筆一〇九字名号親鸞筆一
 蓮如上人手跡二〇梶尾明慧上人手跡一〇高雄文覚上人同一〇小野心海
 同〇兼好法師同〇新古今之端慈鎮和尚筆一〇金光明經端萱蒸相筆一〇青蓮
 院尊道親王手跡一〇近衛龍山公假名文一〇近衛信尹公手跡一〇近衛尚
 嗣公假名文一〇近衛家久公手跡一〇鳥丸大納言光広卿手跡二〇為家卿
 二〇条同一〇小野道風同〇四辻大納言殿和歌一〇飛鳥井榮雅公和歌
 一〇俊成公九十賀和歌一〇前權中納言持豐卿和歌一〇和歌四天王頓阿
 手跡一〇利休居士草書二〇武藏坊弁慶手跡一〇大閤秀吉公草書一〇同
 自草之和歌一〇足利尊氏公手跡一〇新田義貞卿同一〇武田信玄入道同
 一〇中將政宗一〇織田広真自軍中之返書一〇織田兵庫助達広草書一〇
 義達公軍中返書一〇蟻川新右衛門親元手跡同一〇薩摩守忠吉卿同一〇
 扇面詩唐人南郭先生筆一〇二行物張瑞図筆一〇三行物趙子昂筆一〇涅
 槃像洛陽泉涌寺開山俊苒律師自宋国将来一〇五老図文微明筆一〇四天

王之画天竺国王之筆四〇十六羅漢唐画十六〇十六善神唐画二〇牧溪和
 尚五対大幅〇文殊菩薩（唐五道子筆／常洗国師之讃也）〇薬師如来唐画一
 〇蒲衣之文殊宋雪聞筆一〇阿羅漢陸忠信筆二〇面壁達磨顔輝筆一〇繼
 磨居士唐画宋石林和尚讃一〇虚堂和尚肖像唐画一〇布袋唐画一〇老
 子唐画一〇神仙画張士達筆一〇人物画趙子里筆一〇騎馬唐画一〇農
 業ノ図唐画一〇柳二牛唐画一〇山水ノ図夏明遠筆一〇同吳趨唐寅筆一〇
 山家秋景図文微明筆一〇鷺ノ画玉礪筆一〇墨梅楊補之筆二〇同雪崖筆
 一〇同岡風鳴筆一〇鴛鴦除翬筆一〇狩立胡馬ノ図趙子昂筆一〇人物（左
 芭蕉／右松鬼）明梅僊筆一〇花雪趙子昂妻苾道昇筆一〇円唐画一〇牡丹
 趙仲穆筆一〇花雪濃南蘋筆一〇唐士元旦祭祀図一〇維磨居士無住国師
 之讃一〇釈迦（左文殊／右普賢）啓書記筆三〇花嚴之尺尊小栗宗丹筆一
 〇来迎仏恵心僧都之筆一〇不動尊妙沢和尚自画讃一〇維磨左法眼筆一
 〇拾得画然可翁筆一〇観音大士同筆広智国師讃一〇韋駄天英一蝶筆〇阿
 羅漢図〇求聞持本尊〇釈尊降誕誕曼荼羅〇九頭龍権現之神影一〇文殊大
 士雪村筆〇福録寿（左雲龍／右波龍）同筆三〇達磨同筆〇普化禪師江月
 讃〇観音兆殿司筆〇双殿達磨同〇羅漢尊者同〇神仙画同二〇大黒天同
 一〇六祖大師芳蔵坊信海自画讃〇初祖大師（松花堂／画賛）〇月兔同筆
 〇布袋（右寒山／左拾得）秋之坊筆三幅対〇福録寿南禪寺玄甫和尚自画
 讃一〇初祖大師風外老人画讃〇大黒天大心和尚讃一〇南泉斬猫普化禪
 師探幽筆二〇龍虎同筆二〇文宣王同筆一〇祖師像永徳筆一〇聖徳太子
 馬上尊影一〇同勝曼經說法之図一〇寒山拾得秋月筆二〇折葦達摩安閑
 弥仏信筆一〇達磨大師友雪筆明蔵禪師之讃二〇断臂ノ二祖久隅守景筆
 一〇布袋和尚雅樂助筆一〇足利尊氏公馬上肖像一〇當寺大檀那足利義

教卿御影京師鹿苑寺瑞溪和尚讚一〇太閤秀吉公肖像南北國師之贊一〇
寒山子明藏禪師讚〇三聖人雪舟筆一〇山水之図同筆二〇十三仏筆者不
詳〇初祖二祖付法ノ像一〇出山ノ古画一〇臨濟和尚肖像一〇寿老人周
文筆〇山水同筆〇壽老人夢窓國師讚〇神農画筆者不詳〇福祿寿尚信筆
〇西行法師守信筆〇朱買臣画師不詳〇陶淵明洞雲筆〇竹雀筆者難記〇
蛙画同断〇蝦蟇仙人画師不詳睡心讚〇蝦蟇鉄拐画師不詳〇張果良永德
筆一〇神仙画師不詳一〇鷲ノ画一軸松平薩摩守源忠吉卿御筆一〇竹雉
足利義繼公筆一〇竹画筆者不詳〇竹画范古筆〇蓮鷺相阿弥筆二〇鵲
同筆〇蓮葉鯉魚常信筆〇柳燕友松筆〇群鶴探船筆〇鶴画探幽筆〇山水
友雪筆〇鷹画讚万里居士筆〇鷹画本性禪師讚〇巢鷹画大愚和尚讚
〇從是 繪旨、院宣、御教書、御朱印等

後醍醐天皇境内安堵倫旨〇同帝御祈願所繪旨〇光明院同繪旨〇後光嚴
院寺領安堵繪旨〇同帝御祈願所繪旨〇同帝境内安堵繪旨〇当寺由緒繪
旨〇三寶院大僧正光濟繪旨濟翰〇久我内大臣右大將通相卿境内寄進狀
〇同境内手判〇征夷大將軍源尊氏公安堵御教書同断〇足利義詮公寺号
御教書〇同安堵御教書〇足利義滿公同〇同義持公同〇足利義量公同〇
足利義滿教公〇足利義政公〇足利義尚公〇足利義植公等寺領御朱印数
通

〇從是管領家、守護家諸証文制札等
〇細川武藏守頼之証文〇高階師貞同〇細川右京大夫勝元寺領諸役免除
附守護不入地之証文二通足利義政公台筆〇畠山左衛門持国〇当国守護
斯波武衛制札〇同斯波左兵衛義統〇同斯波左兵衛督義重入道道孝〇織
田出雲守入道常竹〇織田伊勢守入道常松〇達勝〇尾州守護斯波左兵衛

義淳制札〇清須城主織田大和守同〇織田紀伊守広遠同〇清須城主織田
五郎同〇織田紀伊守広遠同〇右外諸証文数十通

〇古筆巻物五軸〇富士峰大峨堂筆〇十牛図〇慈覺大師 慈惠大師
後宇多院 後白川院 光明皇后 小野篁 聖護院道誉准后 仁和寺修
理親王 薩摩守忠度 紫式部 聖護院道晃親王 飛鳥井榮雅公自詠
已上折本仮粘り也

〇後光嚴院熱田院宣〇国府宮庁宣〇熱田繪旨同院宣同証文〇伏見院熱
田院宣〇二宮備中省忠契約狀〇入道宗天同〇民部権少輔宗顯寄進狀〇
興元同〇散位長利同〇前美作守泰澄同五〇宗顯同〇入道道寿同〇遠藤
三郎宗次同〇狩野七郎藤原久親同〇北條相模守高時同〇同加判讓狀二
〇散位宗顯寄進狀〇直盛寄進狀〇入道宗天同五〇高階経永同〇僧宗竺
同〇清洲城主織田出雲守常竹同〇織田上野介同〇同左兵衛尉教繼同〇
入道宗覺同〇宗成同〇横田新左衛門尉元行同〇入道淨参同〇光善同〇
橋本入道寛勢同〇新兵衛狀同〇荒尾民部少輔宗顯二〇沙弥寛乗同〇高
階泰隆同二〇熱田大宮司藤原清重同二〇五十〇開山大応國師袈裟一衣
〇開山大照禪師袈裟一衣〇中興圓明國師袈裟秀吉公御寄附〇南京淨瓶
一對〇布袋置物開山所持〇大香合同〇珠鳥香合同〇阿古陀ノ鐘子（中
嶋藏人ノ寄進なり）〇大応國師塔銘抗州路天曆寺住延後撰慶元路真相寺
住持密詣書資善大夫中書省同伯珂篆元製〇秀吉公御膳琉球製沈金彫三
枚〇朝顔之屏風古法眼筆一雙〇薺之衣桁以上秀吉公御寄附〇芥子屏風
永德筆一雙〇小屏風雅楽介筆一雙〇松竹之屏風土佐將監光茂筆一雙〇
二枚折同唐画一雙〇大香合唐製一〇人麿像頓阿作一体〇中央朝鮮渡一
脚〇唐木大卓机一脚〇唐木之料紙箱一箇〇銀箱唐製一箇〇菱花鏡湖師

孫家造一枚○宝鈴天竺渡一口○磬朝鮮打一口○鈴南蛮金唐打一口○三具足高麗渡一通○獅子香炉交趾燒○香炉卓台暹羅渡○青磁高麗燒坂井源助寄進○浮牡丹香炉朝鮮渡一箇○牛香炉交趾燒○清一字明製数寄屋額文微明筆○上堂文微明筆一枚○僧堂柱清規趙子昂筆○方文明可庵和尚筆一枚○天祥庵同筆○座禪救參宋無準和尚筆一枚○祈禱嚴淨同筆○默茶點湯宋趙子昂筆一枚○普回向浴仏偈同筆○中央唐製二脚
右之外靈仏諸軸什物等、数多雖有之、詳不記。

文政三辰春再刻

○三月十六日、定光寺辺、濃州兼山の辺、筒茶碗程のヒヤウ降候由。

○三月廿四日の巷説（八百屋などのヒイキノ考へならん歟。大に／小豆、若和布、折敷など売レ候よし）

庚辰開運の日（晴明内伝に著す／迎運の日なり）

抑、十干の庚ハ金乃兄と訓してカノエと言。則、当年の歳徳にて兄方と云。恵方とハ縁起を表してよふ俗言也。申酉の間にて金を司る方也。十二支の辰ハ、東南の方にて土の方、則当年の大歳の方也。支の土と干の土て土生金と相生する年也。庚の干金支の辰土にて納音金也。扱、当年の本命ハ奎宿也。曆初にしるしあれば見るへし。去卯年也。夫迄七ヶ年の間ハ、北方へ本命宿巡りて水を司る。当辰より西方へ廻りうつり初る宿星也。四百廿一年めにめぐり来る本命宿也。三月ハ建庚辰の月にて、日の本命ハ鬼宿にて、是又二十八宿の内の最上、上の宿星に当る三月廿四日ハ庚辰の日にて十二恵ハ建納音は金也。俗に庚辰は金性とす。尤金を司る干支也。曆を見てしるへし。二十四日の本命ハ土曜星にあたる也。是又土生金と相生する日也。五段ハ庚辰

の刻也。此日を昇運の日とて四百廿一年目に廻る迎運の日なれば、信心あつて運をむかへ給ふへし。

まつり様左のことし

庚辰の年、庚辰の月、庚辰の日、庚辰の時は、文政三年三月廿四日五時に相当。此日辰の初刻大歳辰の方にむかひて火を打、其火を以小豆飯をたき、辰の中刻神の折敷にても土器にても右の小豆飯をもり、若和布を添て三宝に備へ、歳徳の方へまつり、自身に備へ運を願ひ迎ふへし。右赤飯に若和布ハ汁にても用ひて、家内悦ひ食して運を願ふへき也。

黄色なる絹（木綿にても／よし）ちさきさしけ袋（俗にいふ／折ちかへ）を一方に縫、一方の口を明置、金壹分にても、豆銀にても、又は文錢にても身分相応にして清浄にして入置結ひて、右備へ物に添てまつるへし。其日過て辰の日ことに、銀錢の内其日の初穂に入添納むへし。金銀集り、よく金をあつむへし。次第に福者ニなるへし。必うたかふへからず。

○夏、広井八幡社内にて富突興行。此頃三点はり、七ツはりなど云事大に流行す。其後、右体之事不相成旨町触有之候得共止す。

前二入

○四月頃、毎田太須太塔造平之地築ありて木に賑命申候、九月廿木田柱立あり。群集云斗本し。

○四月、広井八幡にて児共相撲ありけるか、裏町并広井東向などの子供等也。勝負の論にて、親同士喧嘩いたし候よし

（朱書）○四月廿一日、桑名町二丁目にて、関戸鍔太郎御妾の宅にて、

中下海福寺前の新兵衛と云者、切腹

○五月、笠寺二王門供養有之。

○三月廿三日、万松寺宝蔵出来の供養あり。（先年上方御寄附の）宝物（託す暇あら□）をも衆人江拝見せしめられける。現住珍牛和尚也。

（朱書）○五月廿六日、白壁町山本兵蔵外長屋焼失。

○五月十二日方十八日迄、三ツ蔵伝光院ニ西国順礼所観音建立。入仏供養あり。

○五月十七日、十八日、終日雨天。馬の塔俄馬多し。

○五月十八日、枇杷島川八合程西美濃ハ切レ所も有之よし。先頃已来降がちにて、植付六ヶ敷由。

○五月廿六日、大風雨つよく雷鳴あり。建中寺、妙寺、香積院（古井ノ村）大破損、奥田町出はなれの家一軒吹上て、人計残て家ハ相応寺の木ニかかりしと云。光り物もありし由。其外所々破損、松原の下の新田庄屋の家も大ニ破損せし由。

○此頃入鹿の池ニ而ウワバミを鉄炮ニ而打候よし。見せ物師買ニ行しに、はやぶたノ切候跡の由。

○あつた大山伝馬町の富士の巻狩ねり物、中瀬町ハめしの道中大にぎ合、此夜あばれ物伝馬町にて召とられる。

○兎角雨多く、七日八日九日終日大雨、十二日方西風晴天。

○陳元賛百五十回忌当りし故、建中寺寺中ニ而礼物等をなす。詩人あまた集会して追善の詩作あり。

○六月十五日、片端試案ニ御園町上ニ而紙さいくの大石灯籠作る。廻り

七尺計。

○六月廿一日、東輪寺大仏殿地形場所定の式有。巳の刻上堂執行、申之刻大せがきあり。大仏定基の場と書ける柱を立、大工等の式ハ無之。

上下着大勢 小僧 衆僧数多 色衣僧 香持僧
同 同 衆僧同 色衣僧

小僧香 方丈 日傘さし僧
同 棒持僧

初りには漢門の前ニ而式あり。夫方仏殿江行列、堂ニ入て祭文を読、問答あり。畢て大仏定基の場へ行列、爰ニ而式あり。読経ありて元の如く列を立、方丈江入也。大施我鬼の式ハ盆中の如くなり。なげもちあり。

○当夏所々楓まばらニあり。春以来打続雨天故、諸草木もいたく枯るも多し。山吹など少咲。

○七月、赤塚医師弟子、火を附て召捕らる。（火事ニハノならず）

○同廿三日、ナカセ空ニ而折々強雨ふる。此夜禪寺町瑞泉寺大松折る。八月迄アレ空なり。

○同廿五日、高橋河内守殿卒去。三日鳴物停止。

○八月、熱田木の目へ津嶋みよし着。祭事役所滞て、漸頃日相済、此節賑合。

○木綿にて作りし小犬のもてあそび、一統にはやる。

○九月廿六日、大須大塔柱建あり。諸講中なけ餅、酒蒸籠如き、塔の地形の上ニ飯屋を構へ、中真のはしらニ金の三ツ扇の黄旗、丑寅の柱ニ

銀の三ツ扇に青簾、巽の柱ニ金三ツ扇の朱はた、坤の柱に銀三ツ扇白はた、乾の柱に銀三ツ扇に黒はたを立、東を正面にしているくのかざり物あり。柱の上にハ紫のまくを打、菊の紋也。外の囲イニハ、南東の方のまくハ㊦（上ニ白あかりニ／して地こん也）すそハ立浪（花色／なり）北と西ハ菊桐の黒紋。白きまくをはる儀式以前ニ日雇方大勢一様のはつぴ（こん地ニ白丸字朱㊦也／すそに大切石なり）真柱の頂上なる小き屋かたへよりて、猫棒に手木をさして柱を引上る真似をして、木やりうたニ而賑合し、此事済て、東北の橋がより大工各行列ニ而出ル。

幣帛持素袍 素袍着 同 棟梁 立ゑほし

脇（かきゑほし／布衣） 同 同素袍着 同 幣帛持 風折ゑほし

素袍着 同 上下着 同 幣帛持 風折ゑほし

○九月廿七日夜八時方納屋町火事、夜明鎮火。火元ハ常滑屋也。諸国の旅商人を止る宿也。ふろや方出る。此辺へ神芦着しとて天王崎へ預し、其たゝりと云説あり。塩屋、高津等大家多く焼失。

○五月十五日、内津の辺にて大蛇（俗にいふ／ウハバミ）を獵人と百姓兩人して打留候よし。尤炮術ハ熟練の者共の由。此日神野仲雄、原篤親など妙見宮江詣せしか、右の様子をきゝ帰り候付、慥なる事なりけり。

○五月十二日、大坂高麗橋三町目桜井謡稽古場おみて、正午時尚齒会。

小謡 亭主 桜井帰蔵 年六十一
小林甚蔵 七十式

蟻通 保田弥七 七十六 小野十大夫 七十二
江口 西山浄志 七十三 米田平右衛門 七十六 山崎仁左衛門 七十

平山英山八十六 筒井忠七 六十八 舟筏与三右衛門 六十三
唐船 唐子 横山加助 六十七 佐藤仁作 七十 間辺仁兵衛 六十八

張良 大西懸阿七十八 別辺七郎 七十

祝言 高田等兵衛 百一
此老人、摂州西の宮近在稽林寺町庄屋にて、今に山畑など見廻り、行歩丈夫なり。

右十六人、年々千百七十一

右書付、山田貞之進といへる人より得之。

○車の町住、与助といへる日雇、今辰年百歳にあまれり。今に日雇に来る。我大道寺家へ毎日日雇に来る事六十余年、寒暑晴雨の差別なく来りて勤め、一日も他に行事なし。我年の数委しくハ覚ぬよし。日々の仕事ハ少々ツ、草を取、又ハ壁土へ入候スサなどをきり、近年ハ尤物の用に立へきと云にてハなしといへ共、久しく来れる日雇、渴命に及ハん事をあハれみて雇ひに成候なり。大道寺家作事小屋方右裏などへ行にハ三四度休て行珍しき者也けり。実年ハ百五六歳之由、今年賀を祝しけるに、仍之所々より賜物あり。翌年正月頓死。右の妻文政九戌年九十歳の賀を祝ふ。是又達者なり。

（朱書）○六月中、志多美村ニ而家々毎に車の引跡あり。家のくるりを丸く引たり。其跡なき家ニ軒ありしか、程なく死絶候よし。

○六月銀子吹直し（丁銀小玉銀計也／式朱ハ文政七申）七月二日より通用之筈、公義御触有之。

○七月よりあつた灯明場前嵩大湊あり（桑名迄の舟道、川筋のことく堀也。星崎の辺ニ此土ニ而新田出来）。是ハ

公義御普請也。御入用金壹万三千両のつもり之由。一坪五匁ツ、にて受取候よし。右辺へ遊参船、殺生船杯堅相越間敷旨御触有之。あの辺芦はへの所、至て奇麗に相成申候。右新堀にて翌年より小鰍大に釣れ申候。

（朱書）○七月十八日夜、五條町八百屋彦助、杉の町松月堂、呉服町井

桁屋、よし町茶碗屋、同町小塩六兵衛、大津町高木屋などへ

盗人入、高木やヲヤヂ切られ申候。

○八月十五夜、冷艶たる満月に近星出て、初ハ随分隔ちありしに段々近くなりて、遂に月を貫きて乾より坤へ出たり。珍奇なる事也。

○打続米価下直ニ付、御容赦筋左之通又々触アリ。

△辰春、御普請役米代上納被差延、同暮二一ヶ年分相束上納之筈ニ。被 仰出暮ニ至り候て、暮分計ニ而春之分ハ被差延、上納時節之儀ハ追而申来筈。

△諸拝借金、去卯年方返納不及被下切被成下候付、左之ヶ條も不及返納候。

一夫路銀、御切符、雑用役料、御手当、筆墨代等返納分

一寺社、御勘定、町、熱田、岐阜、御船手、木曾御材木方、屋敷方、

御下屋敷方、右役所ニ而貸渡金并寺社、佐屋両役所取扱五分利口、

白鳥御材木代年賦上納并江戸御勘定所取扱弁米代方貸渡金共

一父并当人御足高御切米御扶持方等、仍願年賦返納、明和年増上ヶ米代上納、其外滞分上ヶ高之分共

右ヶ條之内江、去卯年致返納候分ハ割戻候。就而者御金場直返納之分者、右役所方知行所物成并御納戸引取之分者、御勘定所

方御足高御切米ニ而引取分ハ御藏役所方夫々割戻方取計筈候間、別紙案文之振手形相調、夫々江懸合受取候事。

但、百姓町人貸者、無差別返納之筈

○矢田ニ而七月十九日、石川伴右衛門式十貫大筒を打。

○此頃、上行坊といへる僧、加持灸点いたし大流行也。金銀錢などハ不受、無料にて加持灸点などをなす。名府一般弘法大師の再誕なりと云あへり。専ら光明真言を授く。此僧并講中目論見にて、名古屋二十一大師と云事を始、彼寺々に茶所など追々建立す。其様子名古屋三十三所観音に異なる事なし。上行坊事程なくすたりて評判なし。いかゝしけるにや。則、二十一大師ヶ所左のことし。

一番	門前町大須	宝生院
二番	門前町	七ツ寺
三番	光明寺町	千手院
四番	三藏筋乳花薬師	東光寺
五番	袋町筋桑名町西へ入	延命院
六番	同所	医王寺
七番	同筋本町西へ入	福生院
八番	桜之町筋長者町西へ入	方等院
九番	正万寺町一丁目	持福院
十番	中下虎薬師	覚鳳寺
十一番	押切町榎之権現	福満寺
十二番	七尾天神	永正寺
十三番	志水町坂下	長栄寺

十四番 長久寺門前 善福院

十五番 出来町 東界寺

十六番 鍛冶屋町下 万福院

十七番 日置 観福寺

十八番 橘町大木戸下犬御堂 法浄寺

十九番 熱田石橋 地藏院

廿番 同所 長福寺

廿一番 同所大薬師 愛染院

○此頃、日蓮宗の僧英智院といへる者説法、所々寺院を廻りて説法す。専ら仏道を以神道に附言す。奇代の弁才にして、講尺師などの

○九月廿七日夜納屋町火事西川端の東側伝馬橋より半丁あまり下の常滑や方出火。南側やけ、本重町の真通り内海やの蔵にてとまる。

○左の書付、年月日分らすといへとも、去年か今年なるへし。しるし置。

一昨廿七日の西風にて、大道寺孫藏殿屋敷境に有之候二かゝゑの松、根共に倒れ、小笠原三九郎殿屋敷米蔵とやらん微塵に碎候由、今少しの事にて馬屋ハ少々損し迄の由、怪我人は無之よし。乍然よほと騒動ニ御座候付、承候趣、一寸申上候。已上

右年月知され共、大道寺孫藏殿、右小笠原隣へ移徙の後の事ゆへ、去年今年の内なるへし。右松ハ名城開闢の以前、天王山中の社木のよし。尤半朽居候由。

○当冬、芸妓評判記二冊物板本ニ出来候処、御停止ニ成候付、大略を左に写置。右本ハ細評ありて、三四十丁程の本二冊也。近來芸妓と称す

る酌女大流行。高貴権門家の招請にも必芸妓なくてハ不興也とそ、い
わんや農商におゐてをや。左の評ハ、長唄表題による評也。

《画像55頁〜57頁参照》

北座

上上吉 おはる 真上上吉 しけ松

きれいさハ見明のない ゆき 芸の味ハ打上つた 心いき

上上吉 おきく 神楽 上上吉 まさ路

さりとハ気のいさむ 名取金 自由にはたらく まひ扇

上上吉 おつゆ 上上吉 友江

当ときいものと諸方へ 出らるゝと座の賑やかな 越後獅子

上上吉 おすて 上上吉 おとふ

言葉も衣装も 京小袖 押出しハ扱も見事な 花紅葉

上上吉 おなみ 上上吉 おきぬ

座しきのおくゆかしい 関の戸 出る日もある出ぬ日もある 村時雨

上上吉 お京 上上吉 おまき

此君にすたれゝも ぬれ扇 上上吉 お八重

上上吉 千代鶴 上上吉 お八重

氣持ハひくからぬ 高砂 当時若手の美しくい 玉川

上上吉 おあさ 上上吉 きぬ路

今少し味のほしい 花の香 仲まはつれにつらい 思ひ藤

上上吉 おりう 上上吉 おきし

座敷のもてニ心を配る 秋時雨 御修行かたらぬと見へる 言の葉

上上士 おまち 上上 おやす
 すかいて見ればよく見へるみすの内 べちゃ／＼とやかましい吉原雀
 上上士 おみさ 上上 おかう
 とこやらに愛をもった 桜尽し また未熟に見へる 四ツの袖
 上上士 おちの 上上 おだい
 お顔ハ厳しう見へる 二王門 色事ハしろからぬ 黒かミ
 上上士 おやす 上上 おせい
 風俗かいたらぬ 出口柳 出られてから間のない 口切
 上上士 おいと 上上 徳松
 つふやかにミへます ひなふり セんたんハ二葉より 香はし
 上上 住路 上上 おちか
 さりとハうつくしい 小紫 御修行ハまたうすい 夏衣
 上上 お俊 上上 おたみ
 ちとふ景氣に見へます 一つ夜着 早う御名の出るやうに まつ尽し
 上上 おのふ 上上 おかな
 お名の出るやうに まつ風 芸ハ一風かわつた うらきく
 上上 吉まつ 上上 おけい
 お兒もお名も男らしい 八郎兵衛 よい御子しやかまだ おほこきく
 上 おやす 上 小つる
 おとしもこととして 十三か年
 上 小てう 上 おつる
 またいたいけな かくれんほ

上 おつま
 上 おまさ
 末たのもしき 若まつ

上 おきん おたか
 おたか かほちや
 とれ／＼もうきななたゝぬ 埋火

とれ／＼もひいきの出そうな ゑんの綱

惣巻軸

功上上吉 おりき

廻す事ハ上手に廻す水車

ワキ

上上吉 おのふ

惣巻頭 芸も衣裳も揃ふた 里けしき

至上上吉 八重次

御功者なれとちとさひた 秋の色

当時休之部

南坐

上上吉 おやゑ

久しうお兒のミへぬ 泊り舟 早う御出勤を まつ風

南坐

上上吉 おてつ

○十一月十七日、左之書付手二入。

大久保加賀守殿方榊原主計頭殿江被相届候書付之写

大久保加賀守足輕

只助養子

浅田鍬蔵 辰二十一才

同人夷子

浅田門次郎 辰十二才

右親淺田只助其外之者へ、去々寅七月傍輩之足輕成瀧万助儀致乱心手疵為負、只助深手にて翌日相果候。万助者其場おゐて捕押へ、一往吟味申付候処全乱心ニ相違無之、猶吟味中入牢申付置候処、当二月牢拔出候付嚴敷尋申付候得共、今以行衛不相知候。然処、牢拔出候上ハ本心ニ立戻候儀と相察し、領分は勿論、御府内共何国迄も親之敵討留度段、書面之者願出候付承届、見合次第其所之役人江相断可申段申渡、御帳江付置候様致度、此段以使者申入候。

八月廿三日

大久保加賀守家来

志谷善兵衛

右承知にて

御曲輪中両山坏者可為遠慮、其外右ニ准し候場所ハ憚候而可然候。一万助儀病死之趣急度相分候ハ、慥成証拠を以立戻り可申事。

右之通差図之由御座候。

右、文政七申年つゝに復讐を遂たり。其始末、申年の巻に出之。

○当冬、小便取、一統に頼来候は、是迄不浄ニ換候米ニ割減し呉候様ニとの旨也。さして承知する者なかりし由。はやり歌にいわく。

安い米をは二わり引むりなきわめ事エ、

どふでも承知ハなりませぬ庄屋触くそくらへ

まこやほしかにどふでもこふてもせにやならぬ

右は、此比桜見よとて名を付てといふ歌はやりしに、なそらへたり。

（右役所へ願候由之処、相対次第たるへきよし、差図のよし）

○十二月、山澄将監豊尚、津田縫殿信任之両侯結構被

仰付ける故、来年巳年の大小にいわく、

偏大

山澄年寄津田任官結構至極

小便取二割之引米相願申候

○十月十七日、成瀬侯家中屋敷七尾天神側火事有。

○同廿二日、成瀬浄翁（隼人正／正）殿死去。廿六日方三日之間鳴物停止。

○十一月八日、日置顕性寺の門棒上、前夜移徙。児音楽有。児ハ女子なり。男子ハ素袍士ゑぼし、女の子供の児の舞ハ珍し。

○十月十五日方五日之間、桑名町下福泉寺ニ而手嶋先生の門人心学興行。

○大須大塔根石すわる。

○十八日、式分金こしらへ、礫ニかゝる。

○十九日夜、玄海家数四百軒程焼失。

○十二月方大須塔初重組かゝる。

○極楽寺門ニ圓光大師印牌建。

庚文政三辰年大小

取締無利五拾年済拝借金捨

大ヘン出来

かんたんを碎て金をかり枕栄花の菅を五十年済

返し

かんたんにかり枕れてあわのいい

あわのゆめ見る五十年済	米こくといふ人は 一二たからをふき出し 二二二歩判をふり出して 三三酒屋の直をさげて 四四夜る昼る嵯峨の釈迦 五五医者どのかけあるき 六六むしやうに駕籠細工 七七夏から利病やみ 八八やたらにこめさがり 九九ころりとしまひつて 十デとくみのなきねいり	御書付之写 小笠原三九郎 大御番頭帰役 御直二被 仰付 思召有之候。御役儀御免被遊候処、組下ハ各別ニ伏候趣相聞候 付帰役被仰付事候。此段申聞候様ニとの御沙汰候	厄はらい やあらみせつけた恐ろしやな、むたいな事て払ふたら、豆ハ四俵二稗
--------------------	---	--	--

八俵、錢ハ上りて米下り、夏の地震ニ所々くずれ、米ハあれとも買てなし、金かりとふてもかせてなし、懸ハ多ふて払はれず、取締勘定皆たらず、給金高ふて人ハなし、町もめいわく、武家こんきう、返上金ハ皆とられ、どふで是でハ勤まらぬ、たいやくせふかと打寄て、其筋へねだり、やすう払ませふ	同 たみはんあたま引こぬき、赤銅やくわんたゝき込、山城やまへもちこんで、成瀬の川へさらり	ナゾ 瀧川ト懸て三匁銀札と解、心ハはげて見苦敷 小笠原ト懸て痘瘡しと解、心ハ十二日目ニさつはりト出る 千賀ト懸て永引タ病人と解、心ハかくに成そふな 高木ト懸て手の有女郎ト解、心ハすがたと口先デだます 五味ト懸て新規抱の辻番ト解、心ハおきてを守ル 広瀬ト懸て生わるの目かけ奉公人ト解、心ハ折々定口へ呼出ス 津田ト懸て花嫁トとく、心ハ何をいつてもあい〜と言ふ 竹腰ト懸て新製トとく、心ハ尾張の出来もの 林ト懸ておきれ蜻蛉ト解く、心ハひとつ所ニまひくシテイル 小瀬ト懸て大井川の水出ト解、心ハせかたらぬ 成瀬ト懸て手負獅子と解、心ハ向ふとしまわれる 渡邊ト懸て子飼の鶯と解、心ハ付立るか大事だ
---	--	---

鈴木と懸て米の飯卜解、心ハ誰かくつてもあかぬ 遠山と懸て田舎から来る嫁卜解、心ハ物をいわすとぎんミリ	物づくし 荒くて向ぬ物か、手負しゝと 尾張の出来物か、新製の瀬戸焼と 一ト足も早く引て貰ひたひ物か、四ツ辻の車と 潰レかゝつてこたへた物か、万ごく衆と 末のおほつかなき物か、唐鳥の流行と 隠分有てよひ物か、沓銀札と 拍子ぬけのした物か、懸所の普請と 有てとんとやくにたゝぬ物か、近眼の目鏡と やみくもに人のいやかる物か、一両米札と 出す入すよい物か、棧とめの袴と はてゝよい物か、角力取の多葉粉入と 金ゆへニ高上りする物か、天神の男と 無性に長イ物か、玄関番の返事と 真すくで損のいく物か、なかうねと こまかひ所で持っている物か、塩見まんちうと 打て付た物か、片端の合羽ほし場と 誰か見ても盗人くさい物か、獵人の頭巾と 今ふらゝとしてゐて人ニ難儀の懸物か、宿送りの病人と 出来そこなつて名を取た物か、高岳院の鐘と 成瀬 竹腰 瀧川 高橋 津田 中條 山澄 林三 小瀬 五味 高木 広瀬 大道寺孫蔵 山吹 月ヶ瀬 鳥居 田宮 水藤 小笠原
---	---

武家ハ飛ひ三九郎ハ歸る世の中に何とて町ハつれなかるらん 向後よろこべ、手形ハ反古ニ成ツたハやひ	本尊米安如来 難波駿河国 三俵荒神 大借山困窮寺 にかゝ敷も、本尊米安如来と申奉るハ、難波駿河国大借山困窮寺ニ おゐて、くうやくわす二日くらして当惑し奉る所の尊像にて、貧する 尊者百日之内断食し給ひて、一統さんゝの御作也。 御前立ハ、豊後国非道郡無利国山強欲寺ニおいて、まいないとりのご し巾着の元祖とにくまれ給ふ。田はん盗人の御作ニして、数の御手ニ 金銀をにぎり、有ヶ上ニもほしかり、我俣如来と申奉るハ是也。或 時、笠原三郎といふ人來許して如来に告ていわく。小身の難波を助ん 事を五日之間に申度与參詣し、丹誠を抽できせいするといへとも、な んのきとくもなく利の当前なれハ、如来の御心に叶わす、忽御冠を蒙 り、御役儀御免寄合地ごく取締勘定ならすのきばをならし、南無無理 たぞくゝとぞ。 宝物 一中條姫我俣多羅 一新左衛門上人の金の珠数入巾着 一新田金エコ 蟲眞の名号 まいない金を上らせませふ 買物高直の御縁記ハ是方出します 下向の御方ハ借金断の方へ御廻りなさい
--	---

瀧豊	三匁銀札	もはや摺か来た
高河	座頭	宮陰計を望む
千与	医者のはないた病人	あすのまもしれぬ
間治	京極メの書画	見た所ハゑいか江戸へやらねハしれぬ
水藤	熊蟬	やかましいが跡がない
大孫	作り花	下二めがない
寺吟	ちんころ	くわせれハなつく
勘吟	千里の薺	竹波にこまつた
町吟	藁鼻緒のぞうり	りゝしいか直ニ藁が出る
留書	水鉄炮の跡もとり	先かつかへた
御納戸	囲もしの懷妊	出来る程こまる
高八	傾城	姿言はニほれられる
堀弥	ころひのない芸者	とこやらか定らぬよふな
月善	門徒衆の仏だん	結構な一篇
山儀	せうぎ持	どうしても向れぬ
田半	船頭	日和計詠メて居る

ほん前ほん後死の道の妙薬

竹田秘法

金子造散

小包 壹分

大子香□（道カ）

大包 □（汚損）両

三匁五朱ハ御断申上候、只大札計ニ而御求メ可被下候

御役所 入江組 広小路 番人 夜廻り 右五色大きん物也	さし合もの
	七月 右両節季ニ売弘申候 極月
功能之覚 一抑、米之国唐人札といへる物ふけきかめくり来り右薬法のごとく残 スといへとも世の人知る事なし。頃ハ人王六十五代米安天王よりも はらひろまる也。夫、病ひの元ハ百つかへ跡むねのいたみ、せつき まへ晦日まへニ大妙薬也。全体此薬ハ紺屋の如ハ直ニきく也。誠ニ 早染の竹田細工からくり業ニ而、生壁しのわざ一家親類煤竹染ニ 顔よごし、ふつつ千歳茶といへともおそし。馬の世中のほり目の 玉ハとひ色、今はやり病ひ、御納戸けん法、三ツ紋、五ツ紋、ごく もん杯ニも薬妙也。是より正月頃ハかちん染ニハ豆の汁ニ而用ゆへ し。なみだ染引かへしくり皮茶ニ而水色ニ而用ひてよし。御町内ハ 昼夜ねづミ染、柳茶、里かん茶、こふ茶のたくひハお茶ニ而用ひべ し。まだく色々功能も御座候得とも、是ニ略ス。くわしくハ別紙 ニしるす。	
本家調合所	信州古渡り郡一之鳥居村 竹田金作製
取次菊屋与九太郎	

千金錢借御家中の妙薬

一抑、此薬ハ、御家中に米安といふ古人有。人久しく錢借ニて首もまわらぬなんぎを仕居ける所、此度豊後国に瀧川津具称と言医者、其病ひにもちかねほし、小笠原九三ト言医者と立合、薬ろん二取しめまけ、瀧川津く称しりぞきける。小笠原九三我か秘方をゑらみあたへける。其やまひ、たちまち治する事神のことし。よつて此度諸人へ錢借のめうやく弘る者也。第一御家中にハいか程□（むカ）つかしき錢借ニても、五十ヶ年之間ニハ治する事請合也。

きんもつ、平人、さしつかへ、はらのいたみ、くるしみハ、あいたいゝ。とかくとりべハいむべし。其外かけ合なし。

一廻り五拾ヶ年之間ニ用、壹両ニ付壹匁式分以上

庚文政三年 辰正月
米安町錢上ル所
本家評定所
無利年済

名古屋下賁の段

髪のはけをしといへとも、是をすらはうれいなん。よくのかわあつしといへとも、是をたゝバかなし。みな人民をせいする事此ころひとし。されハおさまるこの国に猶をもひとうをふれしめる。水上にこるたきつ親仁、当時なまぐらのけんへいにしたかい、しどうしくしる

か死多く、しん子しゝめるかいさんとして、かねてハ民のふしきいなん、わたくしの計りにて、道にかなわぬ悪家老、ふじんの風儀とあらわれたり。

琴歌

武士と言ふも人の名、町人といふも人の名、武士はがり徳ありて、町家をなかせ給ふなり。